

巻 頭 言

大阪医科薬科大学看護学部 教授 佐々木 綾子
(Ayako Sasaki)

大阪医科薬科大学看護研究雑誌は、大阪医科大学看護学部における教員等の研究成果を広く看護界に発信し、看護学の向上と発展に寄与することを目的としています。看護学部が開設された2011年度に創刊され、このたび第14巻の発刊を迎えます。

さて、2023年のトピックスは2点あげられます。1点目は、2020年から続いた新型コロナウイルス感染症について、2023年5月5日WHOがパンデミック終息宣言、日本においては、5月8日に感染症法2類から5類へ変更となり、コロナ対策は大きな転換期を迎えたことです。この間、国内外では新型コロナウイルス感染症拡大に関連した研究が相次いで公表され、研究成果は世界中の人々の不安を軽減し、命を助けることに貢献しました。

2点目は、コロナ禍をきっかけにDX（デジタルトランスフォーメーション）化が加速したことです。このような中、研究と関連する対話型AI「以下チャットGPT」が公表され、現在も進化を続けています。文部科学省、本学も、学校現場での取り扱いに関するガイドラインを明らかにしました。文部科学省は、生成AI活用の適否に関する暫定的な考えとして、1. 適切でないと考えられる例の一方で、2. 活用が考えられる例も示しており、適切な活用については、引き続き議論が必要な状況としています。チャットGPTに関しては、研究分野においても大きな影響を受けます。例えば人が考えて記載する論文よりも、チャットGPTを用いることによりすぐれた論文にしががる可能性も十分に考えられます。

話は変わって、将棋の藤井聡太竜王・名人は、AIを使って将棋の腕を磨いていることが報道されています。しかし、藤井聡太竜王・名人の長考場面を見ていると、AIもヒトの思考にはかなわないのではないかとほっとさせられます。論文執筆も部分チャットGPTの助けを借りることがあるかもしれませんが、最後はヒトの思考が重要ではないでしょうか。しかしチャットGPTの助けを借りた場合、論文の採択率が高まる時代がやってくるかもしれません。人工知能とヒトの共存は未知のできごとです。今後の推移に着目したいと思います。

最後になりましたが、本研究雑誌が、引き続き看護学の知の蓄積となり、独創的な発想へと向かう知の基盤になることを願っています。発刊に向けて、日々、編集作業の労を取って下さいました看護研究雑誌編集委員長はじめ各委員に心より感謝の意を表します。